

令和２年度第２回博多湾環境保全計画推進委員会議事録

■ 日 時 令和２年１２月２３日（水） １４：００～１６：００

■ 会 場 福岡市保健環境学習室（まもる一む福岡）他

■ 出席委員

委員長	楠田 哲也	九州大学 名誉教授
	大嶋 雄治	九州大学大学院農学研究院 教授
	川口 栄男	九州大学 名誉教授
	小島 治幸	九州共立大学 名誉教授
	田畑 俊範	九州大学大学院農学研究院 助教
	内藤 佳奈子	県立広島大学生命環境学部 准教授
	松山 倫也	九州大学大学院農学研究院 教授
	山崎 惟義	福岡大学 名誉教授
	半田 孝之	福岡市漁業協同組合伊崎支所 運営委員会会長
	井上 嘉人	特定非営利活動法人 はかた夢松原の会 副理事長
	中村 雅之	(株)海の中道海洋生態科学館 館長
	濱崎 稔洋	福岡県水産海洋技術センター 漁業環境課長

(欠席) 小野 仁 日本野鳥の会福岡支部 支部長

(順不同、敬称略)

事務局 環境局環境監理部環境調整課
農林水産局水産部水産振興課
道路下水道局計画部下水道計画課
港湾空港局港湾計画部みなと環境政策課

■ 議 事

博多湾の環境保全の今後の方向性について

■ 議事録

- 1 楠田委員長から「博多湾の環境創造」と題し、以下のことについて話題提供
 - (1) 福岡市基本計画にみる博多湾の利用と評価の変遷
 - (2) 自然と人間の関係性
 - (3) 博多湾の環境管理と現状
 - (4) 博多湾の環境保全・改善に必要な視点
 - (5) 博多湾の将来環境像
 - (6) 将来に向けての環境創造戦略

2 質疑応答・意見交換 (●委員長 ○委員)

○これから人口増加も頭打ちとなって、人口減少の方向になってくるが、10年以上の長いスパンで見た場合の博多湾の環境保全に対する提案について、委員長の考えをお伺いしたい。

●これから人口減少期を迎えるにあたって、環境保全の費用を誰が負担するかということがポイントになる。環境と経済を関連付けて互いにフィードバックが続くような仕組みが必要となってくる。そのために必要なこととしては以下のことが挙げられる。

- ・環境保全が経済的に自立すること
- ・そのシステムを支える専門家
- ・行政、住民等が不便さやコストを容認すること

○現在の博多湾について、冬場の栄養塩が足りていないこと、陸域からの土砂が適切に流入してこないことの2点の問題がある。これらについて、委員長のお考えをお伺いしたい。

●植物プランクトンに必要な栄養塩を放流することは制度上可能だと思われる。土砂の流入については、導流堤を設置するなど、出水時の土砂の流れ方や流路を人工的にコントロールすることで、土砂流入を確保する技術も進展してきている。

○将来に向けての環境創造戦略として環境志向型都市経営が挙げられていたが、博多湾の外的な条件がほぼ固定されている中で、変えていけるのは社会関係資本と人的資本だと思われるが、この2点が特に重要であるという認識でよいか委員長のお考えをお伺いしたい。

●社会関係資本も人的資本も重要なものというよりも必須の要素と考えている。博多湾の環境自体は固定されているものだが、博多湾の何を利用するのか、何を見てもらうのかを考えることによって、観光、イベントなどの経済的な収入を増やすための仕掛けは工夫することができ、この部分が操作変数になりうると考えている。

- 環境保全が経済的に自立するための仕組みづくりについては、それぞれのパーツをうまくまとめるためにも行政がバックアップを行うことが重要だと考えるが、委員長のお考えをお伺いしたい。
- 旗振り役を行政が務めるか、民間が務めるかについては、どちらであってもよいと考える。成功事例では、民間がスタートさせて、後から行政がサポートするという事例が多く見られる。
- 環境保全を行っていく中で、ベンチマークの設定の仕方について助言をいただきたい。
- ベンチマークについては、多少問題があったとしても決めた方がいいのか、完璧でないものは決めない方がいいのかという選択となるが、サイエンスベースできちんと決めることが困難な場合が多いため、どこかで行政的判断が必要となる。現在行っている環境保全のための取組みが、現状維持のためではなく、過去にその環境が有していた機能の回復を図るものであれば、どの時代の環境の機能を取り戻したいのか、実行可能性を含めて議論をすることが重要だと考える。過去のデータから数値的なベンチマークを決めることが困難な場合であっても、理想とする数値等を用いてベンチマークを設定してみて、その後改善を繰り返していくというやり方でも構わないと考える。
- 若い人たちに対して、早いうちから博多湾をはじめとした環境に関する教育をしていく必要性を感じている。小学生に博多湾の水質を測ってもらうなどの体験をとおして、市民が自発的に様々な取組みを行うようになれば、行政としても取組みが行いやすくなるのではないかと考える。
- 若い人たちへの教育や研究者のサポートを行っていきたいと考えている。環境保全は楽しくないと人が入ってこないため、堅苦しくなく、楽しんでやれるような取組みにより理解を広げていきたい。そういった取組みが人的資本、社会関係資本につながっていくと考えている。
- 博多湾の素晴らしさを情報としてどれだけ発信できているかという点について、物足りなさを感じている。例えば、アマモ場の状況やカブトガニの産卵場、渡り鳥の種類・個体数等について、リアルタイムで発信できるような取組みを行ってはどうか。情報発信は若い人への啓蒙でもあるため、市として情報発信に積極的に取り組んで欲しい。
- 水質等の自動計測は多くのところで行われているし、技術的にもかなり進んでいるため、ぜひ市でも取り組んでもらいたい。生データの配信等があれば、それを研究者等が用いることで、新しい発見があるかもしれない。